

靖安北街贈李二十 靖安の北街にて李二十に贈る

榆莢抛錢柳展眉 榆莢は錢を抛ち柳は眉を展ぶ、
兩人竝馬語行遲 兩人馬を竝べて語り行くこと遅し。
還似往年安福寺 還似たり往年の安福寺、
共君私試却廻時 君と共に私試して却廻する時。

【題義】靖安里の北街で李逢吉に贈つた詩である。

【詩意】今や春の末で榆莢が錢の如き莢を抛ち柳が眉の如き葉を展べてゐる。君と二人で馬を竝べて語りつつ行けば、馬の進みも至つて遅い。丁度先年君と共に私試して安福寺に歸つて來た時の景況に似てゐる。

重傷小女子

重ねて小女子を傷む

學人言語凭牀行 人の言語を學び牀に凭りて行く、
嫩似花房脆似瓊 嫩なること花房に似脆きこと瓊に似たり。

【字解】(一)嫩 柔弱なこと。花房は花ぶさ。(二)瓊 未だ成人せずして死す

纔知恩愛迎三歲

纔に恩愛を知りて三歳を迎ふ

未辯東西過一生

未だ東西を辯へず一生を過す

汝異下殤應殺禮

汝は下殤に異り應に禮を殺ぐべし、

吾非上聖詎忘情

吾は上聖に非ず詎ぞ情に忘れん。

傷心自歎鳩巢拙

心を傷しめて自ら歎く鳩巢の拙なきことを、

長墮春雛養不成

長く春雛を墮して養ひ成らず。

【題義】重ねて女子金鑾の死を悲んだ詩である。

【詩意】人の言葉を真似し履掛につかまつて歩くことが出来るやうになり、花の如く瓊の如く柔弱な少女であつた。三歳になつて恩愛の情もわかるやうになつたが、まだ東西もわからない中に死んでしまつた。お前は下殤ではないから喪禮も簡略にすべき筈であるが、吾は上聖ではないから悲を忘れることが出来ない。鳩のやうに巢を作るのが拙で、折角の雛を育て上げることも出来ないでしまつたことを自ら嘆いてゐる。

過顔處士墓

顔處士の墓を過る

向墳通徑沒荒榛 墳に向ふ通徑は荒榛に沒し、

【字解】(一)顔處士 顔は姓。學識ありて官職に就かない人を處士といふ。(二)荒榛 草叢。

滿室詩書積閣塵。室に滿つる詩書は閣塵を積む。
 長夜肯教黃壤曉。長夜は肯て黃壤をして曉けしめんや、
 悲風不許白楊春。悲風は白楊の春を許さず。
 簞瓢顔子生仍促。簞瓢の顔子は生仍促なり、
 布被黔婁死更貧。布被の黔婁は死して更に貧し。
 未會悠悠上天意。未だ會せず悠悠たる上天の意、
 惜將富壽與何人。惜みて富壽を將て何人に與ふる。

【三】長夜。死をいふ。黃壤は黃泉の
 下。【二】白楊。墓上の木。【一】
 簞瓢。飯を盛る籠と水をいれる瓢。
 顔子は孔子の弟子顏回。論語に「賢
 なる後回や一簞の食一瓢の飲、陋巷
 に在り」とある。【六】布被。布
 の。黔婁は齊國の隱士。【七】
 悠悠。遙遠の貌。上天は天帝。

【題義】顔處士の墓を弔ひて作つた詩である。

【詩意】塚に向ふ徑は草叢に埋もれ、室内の書物は塵が積つてゐる。一旦死んでは又と再び還ること
 は出來ず、悲風が吹いて白楊に春がめぐつて來さうもない。君は顏回と同じく天死し、黔婁と同じく
 死後まで貧しい。一體天帝は富と壽とを惜んで誰にやる積りなのであらうか、實に天帝の氣が知れな
 い。

題周皓大夫新亭子二十二韻

周皓大夫の新亭子に題す二十二韻

東道常爲主。南亭別待賓。
 規模何日創。景致一時新。
 廣砌羅紅藥。疎窓蔭綠筠。
 鏤開賓閣曉。梯上妓樓春。
 置醴寧三爵。加籩過八珍。
 茶香飄紫筍。膾縷落紅鱗。
 輝赫車輿鬧。珍奇鳥獸馴。
 獼猴看檻馬。鸚鵡喚家人。
 錦額簾高捲。銀花蓋慢巡。
 勸嘗光祿酒。許看洛川神。
 斂翠凝歌黛。流香動舞巾。
 裙翻繡瀉鵝。梳陷鈿麒麟。
 笛怨音含楚。箏嬌語帶秦。

東道常に主たり、南亭別に賓を待つ。
 規模何れの日か創むる、景致一時に新なり。
 廣砌には紅藥を羅ね、疎窓には綠筠を蔭ふ。
 鏤は賓閣の曉に開き、梯は妓樓の春に上る。
 醴を置いて三爵を寧んじ、籩を加へて八珍を過す。
 茶香紫筍に飄へり、膾縷紅鱗を落す。
 輝赫車輿鬧しく、珍奇鳥獸馴る。
 獼猴は檻馬を看、鸚鵡は家人を喚ぶ。
 錦額簾高く捲き、銀花蓋慢く巡る。
 勸めて光祿の酒を嘗めしめ、許して洛川の神を看しむ。
 翠を斂めて歌黛を凝らし、香を流して舞巾を動かす。
 裙翻へりて繡瀉鵝を繡し、梳陷りて鈿麒麟を鈿にす。
 笛怨んで音楚を含み、箏嬌びて語秦を帯ぶ。

侍兒催畫燭。醉客吐文茵。

侍兒畫燭を催し、醉客文茵に吐く。

投轄多連夜。鳴珂便達晨。

轄を投じて多く夜を連ね、珂を鳴らして便ち晨に達す。

入朝紆紫綬。待漏擁朱輪。

朝に入りては紫綬を紆ひ、漏を待ちては朱輪を擁す。

貴介交三事。光榮照四鄰。

貴介三事に交はり、光榮四鄰を照らす。

甘濃將奉客。穩煖不緣身。

甘濃將て客に奉ず、穩煖身に緣らず。

十載歌鐘地。三朝節鉞臣。

十載歌鐘の地、三朝節鉞の臣。

愛才心倜儻。敦舊禮殷勤。

才を愛して心倜儻、舊に敦うして禮殷勤。

門以招賢盛。家因好事貧。

門は賢を招くを以て盛なり、家は事を好むに因つて貧し。

始知豪傑意。富貴爲交親。

始めて知る豪傑の意、富貴は交親のためなるを。

【字解】(一) 東道 宴會の主人をいふ。(二) 規模 結構。(三) 長致 風景勝致。(四) 廣阿 廣い庭。紅藥は芍藥。(五) 綠筠 緑の竹。(六) 餽 饌なり。(七) 醴 酒なり。三爵は三杯。禮記玉藻に「君子の酒を飲むや、一爵を受けて色酒如たり。二爵して言ふ、言これ禮のみ。三爵して油油として以て退く」とある。(八) 運 肉を盛る竹器。八珍は八種の美味。(九) 贈 贈。緑の如く細きなます。(一〇) 光祿 官名。光祿大夫。(一一) 洛川神 伏羲氏の女。洛水に溺死して神となる。魏の曹植洛神賦を作る。(一二) 瀛洲 水島の名。(一三) 餽 象服すること。(一四) 文質 美しきしとれ。(一五) 投轄 客を引留めること。轄は車のくまび。漢の陳遵大に客を會し、輒ち門を閉ち、車轄を取りて井中に投じ客をして去るを得ざらしむ。(一六) 鳴珂 珂は馬を飾る玉。(一七) 紫綬 紫の印綬。(一八) 待漏 朝早く出仕し宮門の開く時刻を待つこと。朱輪は朱塗の車。(一九) 貴介 貴人。三事は大夫をいふ。(二〇) 十載 十年。(二一) 節鉞 武臣。(二二) 倜儻 卓異なり。(二三) 殷勤 親切なこと。

【題義】 光祿大夫(官名)周皓の新亭に題した詩である。

【詩意】 大夫は客を好み常に主人として客を招待するが、今又南亭を構へて客を招宴することになつた。いつ頃から建築し始めたのか知らないが、今見れば景致が全く一新した。廣い庭には芍薬が列り、窓外には緑の竹が蔭を成し、晩に客室の錠前を開き、梯を上りて妓樓の春色を賞するといふ仕組である。獻酬皆禮に叶ひ、筵には美味を盛り、茶の香氣は筍に飄り、細き脰は紅鱗を落し、車輿雜聞するも禽獸馴れて驚かず。簾を巻き盡を飛ばし、美酒を酌み美妓を見るを許す。美妓の粧はと見れば裙には鸚鵡の刺繡をなし、櫛には麒麟の象眼をなし、笛聲は楚怨を含み、秦箏は嬌麗を帯びてゐる。夜に入りては侍兒燭を促し、醉客錦繡を吐き、客を引留めて歸るを許さず、晩に到るまで玉珂の聲が聞える。さて大夫は朝に入りて紫綬を紆ひ、朱塗の車に乗りて宮門の開くを待つ貴人であるが、よく諸大夫に交り、厚く客を待遇して、専ら己の身に厚くせず。三朝に仕へて武臣となり、賢士を招くを以て家は益々榮えるが、客を好むので私財は富んでゐない。是に於て豪傑といふものは、交親の爲に富貴を用ひるものだといふことがわかる。

賦得聽邊鴻

邊鴻を聴くを賦し得たり

驚風吹起塞鴻羣

驚風吹き起す塞鴻の羣

【字解】(一) 驚風 卷十四、玉

半拂平沙半入雲。半は平沙を拂ひ半は雲に入る。
爲問昭君月下聽。爲に問ふ昭君の月下に聽くは、
何如蘇武雪中聞。蘇武の雪中に聞くに何如。

【二】蘇武、漢の武帝の時、中郎將を以て匈奴に使し、北海上人なき處に拘留せられ、雪を嚼み麩を呑み飯を牧すること十九年にして還る。

【題義】邊地の雁聲を聴くといふ課題に就いて此詩を賦し得たといふのである。
【詩意】急風が邊塞の雁羣を吹き飛ばし、一半は沙漠の沙を吹き拂ひ、一半は高く雲中に吹き入る。かかる光景を見ながら昭君が月下に於て雁聲を聴いた悲しさと、蘇武が雪中に於て聴いた悲しさとはいづれが強かつたであらうか。

見楊弘貞詩賦因題絕句以自論

楊弘貞が詩賦を見、因つて絶句を題し以て自ら論ず

賦句詩章妙入神。賦句詩章妙神に入る、

未年三十卽無身。未だ年三十ならずして卽ち身なし。

常嗟薄命形憔悴。常に嗟く薄命にして形の憔悴するを、

若比弘貞是幸人。若し弘貞に比すれば是れ幸人。

【字解】【一】無身、老子に、及吾無身、吾有何患とある。
【二】薄命、不申なこと。憔悴は衰へること。

【題義】楊弘貞の詩賦を見、感ずる所を述べて此詩を作り、自ら警めたのである。
【詩意】弘貞の作つた賦と詩とは實に入神の妙がある。まだ三十にならないのに、能く吾身を外にして心の迷を超脱してゐるのは感すべきことだ。余は常に不運にして身の衰へてゐることを嘆いてゐるが、弘貞に比すれば、まだまだ幸福だと謂つてよい。

病中早春

病中早春

今朝枕上覺頭輕。今朝枕上頭の輕きを覺え、

強起堦前試脚行。強ひて起ちて堦前脚を試みて行く。

羶膩斷來無氣力。羶膩断ち來つて氣力なく、

風痰惱得少心情。風痰惱み得て心情少し。

煖銷霜瓦津初合。煖銷して霜瓦津初めて合ひ、

寒減冰渠凍不成。寒減じて氷渠凍成らず。

唯有愁人鬢間雪。唯愁人鬢間の雪のみあり、

不隨春盡逐春生。春に隨ひて盡きず春を逐うて生ず。

【字解】【一】羶膩、濃厚な肉食。

【二】風痰、狂痴の病。

【三】氷渠、氷のはつた溝。

【四】愁人、樂天自ら謂ふ。

【題義】病中早春を迎へて作つた詩である。

【詩意】今朝は少し頭が軽いやうに思はれるので、強ひて起きて脚試に庭先を歩いて見た。久しく肉類などを食はないので氣力が衰へ、狂癩の結果何を見ても感興を動かさない。煖氣が瓦の霜を溶して露が結び、寒威がゆるんだので溝も凍らない。ただ我が鬢の雪は春が盡きても盡きないのに、生える時は春と俱に生える。困つたものだ。

送人貶信州判官

人の信州判官に貶せらるるを送る

地僻山深古上饒 地僻に山深し古上饒

土風貧薄道程遙 土風貧薄にして道程遙なり

不唯遷客須恹屑 唯遷客のみ須く恹屑すべきのみならず

見説居人也寂寥 見説く居人も也寂寥たり

溪畔毒沙藏水弩 溪畔の毒沙は水弩を藏し

城頭枯樹下山魃 城頭の枯樹は山魃を下す

若於此郡爲卑吏 若し此郡に於て卑吏とならば

【字解】(一) 信州 江西省上饒

縣の地。判官は州縣の簿書を掌る官。

(二) 遷客 貶せらるる人。恹屑は

悲むこと。(三) 居人 土人。(四)

水弩 蟲の名。水中に在り、沙を含

んで人を射る。(五) 山魃 南唐記

に「山間に木客あり、形骸皆人なり。

ただ鳥爪のみ。高樹に巢くひ、樹を

伐れば必ず人を害す」とある。(六)

此郡 信州を指す。(七) 刺史 州

刺史廳前又折腰

刺史の廳前又腰を折らん

【題義】人の信州判官に貶せられるのを送つた詩である。

【詩意】信州は山間の僻地で昔は上饒と謂つた。土地が貧弱で道も遠い。されば遷客たる君が悲むのは勿論のこと、土地の人さへ生氣がなくなつてゐる。溪畔の毒沙には水弩が潜んで居り、城頭の古木には山魃が棲んでゐる。其上こんな處の卑吏になると、刺史の前に腰を折つてべこべこせねばならない。氣の毒なことだ。

曲江醉後贈諸親故

曲江にて醉後諸親故に贈る

郭東丘墓何年客 郭東の丘墓は何の年の客ぞ

江畔風光幾日春 江畔の風光は幾日か春なる

只合殷勤逐杯酒 只合に殷勤に杯酒を逐ふべし

不須疎索向交親 須ひず疎索にして交親に向ふを

中天或有長生藥 中天或は長生の藥あらん

下界應無不死人 下界應に不死の人なかるべし

【字解】(一) 曲江 長安の遊園

地。前に見ゆ。

(二) 郭東 長安城外。

(三) 殷勤 れんごらに。

(四) 疎索 疎闊なり。

(五) 中天 人間世界。

除却醉來開口笑。醉ひ來りて口を開いて笑ふを除却せば、
世間何事更關身。世間何事か更に身に關らん。

【題義】曲江に遊んで醉後に親友等に贈つた詩である。

【詩意】長安の郊外に繁榮としてゐる墓の主は、いつの世の人かといへば、つい近頃まで此世にゐた人だ。曲江のほとりの春色も瞬く間に去つてしまふのである。だから親友相會して酒杯を俱にするがよいので、疎闊にして空しく春を過すべきではない。天上には長生の藥があるかも知れぬが、下界には不死の人などはありはしない。如かず生前一杯の酒だ。酔うて口を開いて笑ふのが吾願ひで、それをおいては世上の事は吾が頓著する所ではない。

和元八侍御升平新居四絶句 時方與元

元八侍御が升平の新居に和する四絶句 時方に元八と鄰をトす

【題義】元八侍御（八は排行、侍御は官名）が長安の升平里に新居を構へたのに和した詩で、當時樂天も其鄰に住んでゐた。

看花屋

看花屋

忽驚映樹新開屋。忽ち驚く樹に映じて新に屋を開く、
却似當簷故種花。却つて似たり簷に當りて故より花を種ゑしに。
可惜年年紅似火。惜むべし年年紅火に似たり、
今春始得屬元家。今春始めて元家に屬するを得たり。

【題義】牡丹の花を見る爲の亭に就いて述べた詩である。

【詩意】樹に映じて新に亭が開かれた。丁度簷前に花があるのは、豫定して植ゑたもののやうだ。年年火のやうに赤く咲く牡丹の花が、今年始めて元家の所有に歸したのは悦ばしい。

累土山

累土山

堆土漸高山意出。堆土漸く高うして山意出づ、
終南移入戶庭間。終南移し入る戸庭の間。
玉峯藍水應惆悵。玉峯藍水應に惆悵すべし、
恐見新山忘舊山。恐らくは新山を見て舊山を忘れんことを。

【字解】(一) 累土山 築山。

(二) 終南 長安の南に在る山の名。

(三) 玉峯 藍田山をいふ。此山に美玉を産するを以てなり。藍水は藍田山下の川。

元八舊居在藍田山。

律詩 和元八侍御升平新居四絶句・看花屋・累土山

【題義】元八の新居の築山に就いて述べた詩である。

【詩意】土を盛り上げて段段高くしたので本當の山らしくなり、丁度終南山を庭の中に移し入れたやうだ。玉峯や藍水が元八の新山を見て舊山を忘れてしまふであらうと悲むであらう。

高亭

高亭

亭脊太高君莫拆。亭脊太だ高きも君拆くこと莫れ、
東家留取當西山。東家留め取つて西山に當つ。
好看落日斜銜處。好し落日の斜に銜む處を看れば、
一片春嵐映半環。一片の春嵐半環に映す。

【字解】〔一〕東家。東鄰。樂天の家を指す。前の歌「元八」トト鄰先有是階を見よ。

【題義】高亭に就いて述べた詩である。

【詩意】亭の脊が非常に高いけれども切つて低くせぬがよい。東鄰の僕の家ではそれを西山に見立てて眺めてゐるのだ。そこへ西日の斜に傾いた時に、一片の春嵐が半環に映じて實に美しい。

松樹

松樹

白金換得青松樹。白金換へ得たり青松樹。

君既先栽我不栽。君は既に先づ栽ゑたれども我は栽ゑず。

幸有西風易憑仗。幸に西風の憑仗し易きあり、

夜深偷送好聲來。夜深けて偷に好聲を送り來る。

【字解】〔一〕憑仗。よりたのむ。

【題義】元八が新居の松樹に就いて述べた詩である。

【詩意】松の樹を買つて来て、君は既に植ゑたが僕はまだ植ゑない。幸に西風が僕に同情して、夜深になると窺に松風の美音を送つてよこす。

醉後却寄元九

醉後元九に却寄す

蒲池村裏匆匆別。蒲池村裏匆匆として別れ、

灑水橋邊兀兀廻。灑水橋邊兀兀として廻る。

行到城門殘酒醒。行きて城門に到れば殘酒醒め、

萬重離恨一時來。萬重の離恨一時に來る。

【字解】〔一〕蒲池。村の名か。匆匆は急遽の義。

〔二〕灑水。灑水を秦嶺に發し、西北流して長安を經、渭河に注ぐ。兀兀は心を用ふる貌。

〔三〕城門。長安の城門。

【題義】元九（元稹）が通州（四川省に屬す）司馬に貶せらるる事になつたので、元和十年三月三十

律詩 和元八侍御升平新居四絕句・高亭・松樹 醉後却寄元九

日(卷十七、十年三月三十日別三微之於灑上云云と題する詩參照)灑水のほとりで離宴をなし、長安に歸りて醉後に此詩を寄せたのである。

【詩意】蒲池村でせわしく君と別を告げ、灑水の橋をとぼとぼと渡つて獨り歸つた。長安の城門まで來ると酒が急に醒めてしまつて、君と別の悲さが一時にこみあげて來た。

重寄 一作三重 寄三元九

重ねて寄す 一に重ねて元九に寄すに作る

蕭散弓驚鴈、分飛劍化龍。蕭散にして弓鴈を驚かし、分飛して劍龍に化す。悠悠天地内、不死會相逢。悠悠たる天地の内、死なずば會す相逢はん。

【字解】(一) 蕭散、しづかにしてひまなこと。(二) 劍化龍、養字志に、龍泉縣の南五里の水、以て劍を淬すべし。昔人水に就いて之を淬す。劍龍に化して去る。龍泉は楚の分なり、涇州も亦然り、故に元九が涇州に貶せられしことをいふ。(三) 悠悠、遙なる貌。

【題義】重ねて元九に寄せた詩である。【詩意】静な穩な時に俄に弓張の音が響き渡り、鴈(樂天并に元九に喩ふ)が驚いて分れ飛び、君は通州に貶せられる事になつた。天下は廣大無邊ではあるが、命のあるうちに又必ず相逢ふであらう。

李十一舍人松園飲小酎酒得元八侍御詩敍云

在臺中推院有鞠獄之苦即事書懷因酬四韻

李十一舍人の松園にて小酎酒を飲む、元八侍御が詩を得たり、敍に云はく臺中推院に在り、獄を鞠するの苦ありと、事に即き懷を書し、因つて四韻を酬ゆ

愛酒舍人開小酌、酒を愛する舍人小酌を開き、

能文御史寄新詩、文を能くする御史新詩を寄す。

亂松園裏醉相憶、亂松園裏酔ひて相憶ひ、

古柏廳前忙不知、古柏廳前忙しくして知らず。

早夏我當逃暑日、早夏我暑を逃るる日に當り、

晚衙君是慮囚時、晚衙君是れ囚を慮る時。

唯應清夜無公事、唯應に清夜公事無かるべし、

新草亭中好一期、新草亭中好し一たび期せん。

元九升平宅、新立草亭。

【題義】李十一舍人(李建、字は杓直、中書舍人たり)の松園で小酎酒(酒の名)を飲んだ。時に元八侍御(八は排行、侍御は侍御史の略で官名)から詩をよこした。その序に今御史臺の推院(罪人

律詩 重寄 李十一舍人松園飲小酎酒得元八侍御詩因酬四韻

【字解】(一) 古柏廳、御史の役所には柏樹あり。

(二) 晚衙、夕方役人の事務を執ること。

を取調べる處)に於て罪人を取調べてゐるから宴に列することは出来ないと言ひてある。因つて事の大第を述べて四韻八句の律詩を元八に酬いたといふのである。

【詩意】酒好きな李舍人が小宴を催した所が、詩の上手な元侍御が断りの詩をよこした。吾吾が此松園の中に酔うて君を憶つて居るのに、君は職務多忙で其れとも知らずにゐる。今や夏の初で我等は暑を避けてゐるのに、君は夕方まで白洲で罪人を取調べてゐる。併し夜になれば公用もあるまいから、君の草亭に往つて又一酌致さうと思ふ。

重到華陽觀舊居

重ねて華陽觀の舊居に到る

憶昔初年三十二。憶ふ昔初めて年三十二、

當時秋思已難堪。當時秋思已に堪へ難し。

若爲重入華陽院。若爲ぞ重ねて華陽院に入る、

病鬢愁心四十三。病鬢愁心四十三。

【題義】重ねて華陽觀の舊居を訪ひ感慨を述べた詩である。

【詩意】憶へば年三十二の時に此觀に籠居し、受験準備の爲に大に勉強したもので、その頃でも秋になると感慨に堪へなかつた。今や身は衰老し心は愁に鎖され、四十三にもなつて格別花實も咲かぬ状態

【字解】(一) 華陽觀 制舉に應ずる前、受験準備の爲に樂天が引籠つてゐた道觀の名。

題で、なせ又思出の深い此觀に來たのであらう。いつそ來なければよかつた。

答勸酒

酒を勸むるに答ふ

莫怪近來都不飲。怪む莫れ近來都て飲まざるを。

幾回因醉却沾巾。幾回か醉に因りて却つて巾を沾す。

誰料平生狂酒客。誰か料らん平生の狂酒客。

如今變作酒悲人。如今變じて酒に悲む人と作らんとは。

【字解】(一) 巾 手巾。

(二) 如今 今。

【題義】人の酒を勸めるのに答へた詩である。

【詩意】近頃僕が酒を飲まないのを怪み給ふな。酔ふと悲くなつてたまらないのだ。これまで狂酒客の名を取つた男が、今は酒に悲む人とならうとは、誰も思ひ設けぬことであらう。

題王侍御池亭

王侍御の池亭に題す

朱門深鎖春池滿。朱門深く鎖して春池滿つ、

岸落薔薇水浸莎。岸は薔薇を落して水は莎を浸す。

【字解】(一) 朱門 朱塗の門。

(二) 莎 草の名。子供等が重んぜられて蚊帳の形を作りて遊ぶより、カヤ

畢竟林塘誰是主。畢竟林塘誰是主。主人來少客來多。主人來ること少くして客來ること多し。

【題義】王侍御（王は姓、侍御は官名）の池亭に題した詩である。

【詩意】朱塗の門が深く鎖され、春の池には水が満ちてゐる。岸には盛を過ぎた薔薇の花が落ち、水の中には莎草が生えてゐる。この池亭は誰が主人なのだかわからない。主人の來ることは少く、客ばかり來てゐるから。

聽水部吳員外新詩因贈絕句

水部吳員外の新詩を聴き、因つて絶句を贈る

朱絨仙郎白雪歌。朱絨の仙郎白雪の歌、

和人雖少愛人多。和する人少しと雖も愛する人は多し。

明朝說向詩家道。明朝說きて詩家に向ひて道はん、

水部如今不姓何。水部は如今何を姓とせずと。

【字解】朱絨、赤色の印綬。仙郎は員外郎をいふ。白雪は、すぐれてよき詩をいふ。宋玉の文に「陽春・白雪、國中屬して和する者數十人に過ぎず」とある。【二】如今、今は。何は樂の何處に對していふ。何處は官與書水部郎に連り、詩文に巧にして何水部の稱あり。

【題義】水部員外郎（官名）吳氏の新作の詩を聴き、此絶句を贈つて其巧をほめたのである。

【詩意】吳水部の詩は非常にすぐれた詩で、倡和する人は少いが愛誦する人は多い。自分も明朝詩人仲間披露しよう。昔は何水部と謂つて稱讚したが、今の水部は何といふ姓ではなくて吳といふ姓である。

雨夜憶元九

天陰一日便堪愁。天陰ること一日なるも便ち愁ふるに堪

何況連宵雨不休。何ぞ況んや連宵雨休まざるをや。

一種雨中君最苦。一種雨中君最も苦まん、

偏梁閣道向通州。偏梁の閣道通州に向ふ。

【題義】雨の夜に元九を憶うて作つた詩である。

【詩意】天が一日曇つてさへも氣がくさくさするの、此頃のやうに連夜の雨ではやりきれない。同じ雨の中でも君は特に苦んでゐるであらう。偏鄙な梁州の棧道を経て通州に向ふのであるから。

雨中攜元九詩訪元八侍御

雨中元九の詩を攜へて元八侍御を訪ふ

律詩 聽水部吳員外新詩因贈絕句 雨夜憶元九 雨中攜元九詩訪元八侍御

微之詩卷憶同開。微之の詩卷同く開かんことを憶ふ、
 暇日多應不入臺。暇日には多く應に臺に入らざるべし。
 好句無人堪共詠。好句人の共に詠するに堪ふる無し、
 衝泥蹋水就君來。泥を衝き水を踏み君に就き來る。

【字解】(一) 微之。元稹の字。
 (二) 臺。御史臺。元八の務めてゐる役所。

【題義】雨を冒し元稹の詩を攜へて元八侍御を訪うたことを述べた詩である。

【詩意】微之の詩卷をば君と一緒に展讀しようと思ひ、今日は休日だから多分役所へも行くまいと思つて、こんな結構な詩を共に詠誦するに足る人は外にないので、惡路を冒して君の處へ來たのである。

贈楊祕書巨源

楊嘗有贈盧洛州詩云三刀夢益州、一箭取遼城、由是知名。

楊祕書巨源に贈る。楊嘗て盧洛州に贈る詩あり、云く三刀夢益州、一箭取遼城、是に由りて名を知らる。

早聞一箭取遼城。早に聞く一箭遼城を取るを、
 相識雖新有故情。相識るは新なりと雖も故情有り。
 清句三朝誰是敵。清句三朝誰か是れ敵、
 白鬚四海半爲兄。白鬚四海半兄と爲る。

貧家薙草時時入。貧家草を薙ぎて時時入り、
 瘦馬尋花處處行。瘦馬花を尋ねて處處に行く。
 不用更教詩過好。更に詩をして好きに過ぎしむるを用ひず、
 折君官職是聲名。君が官職を折くは是れ聲名。

【題義】楊巨源に贈つた詩である。巨源、字は景山、河中の人。貞元五年の進士で、時に祕書郎であった。後太常博士、禮部員外郎を歴て出されて鳳翔少尹となり、また召されて國子司業となり、年七十を以て致仕した。歸る時、時の宰相が天子に白して河中少尹となし、終身其祿を給した。韓退之の文に送楊少尹序といふのがある。巨源の楊柳と題する、水邊楊柳鞠塵絲、立馬煩君折一枝、唯有春風最相惜、殷勤更向手中吹。といふ詩は特に有名である。

【詩意】君の一箭遼城を取るといふ詩は早くから聞いて知つて居る。されば識り合ひになつたのは新しいが精神的には久しい交誼があつたのである。君の妙詩は三朝にわたりて敵する者なく、既に白鬚の長老になつて天下到處兄株で通れる。併し何日も貧乏で家の周圍は草茫茫であるが、聊かも意に介せず、瘦馬に乗つて花を尋ねまはつてゐる。さて此上にも詩を上手に作ることはせぬがよい。君は詩名が高い爲に却つて昇進が出来ないのであるから。

和武相公感韋令公舊池孔雀同用深字

武相公の韋令公が舊池の孔雀に感ずるに和す同じく深の字を用ふ

索寞少顔色。池邊無主禽。
難收帶泥翅。易結著人心。
頂毳落殘碧。尾花銷闇金。
放歸飛不得。雲海故巢深。

【字解】(一)索寞、孔雀の勢のよくないこと。(二)頂、頭上の柔毛。(三)雲海、孔雀は南方の産なる故かくいふ。

【題義】武相公とは武元衡を指して言ふ。元衡は元和二年に門下侍郎平章事になつたから相公と言つたのである。元衡は後出されて劍南節度使となつた。全唐詩に、西川使宅、有韋令公時孔雀存焉、暇日與諸公同飯、座中兼故府賓妓興嗟久之、因賦此詩、用廣其意、と題する詩が載せてある。韋令公は韋卓を指すのであらう。令公とは中書令の尊稱である。韋卓は貞元の初、劍南西川節度使となつた。【詩意】この孔雀は、勢がよわつて見る影もなく、池邊に世話する人もゐない。泥のついた翅を整へることも出来ず、何處となく人なづこい感じを抱いてゐるらしい。頭上の柔毛は僅に碧色を存し、尾の花模様は金色が暗くなつた。放しても飛ぶ力もないから、雲海遠き古巢には歸れさうもない。

寄生衣與微之因題封上生衣を寄せて微之に與へ、因つて封上に題す

淺色穀衫輕似霧。淺色の穀衫霧よりも軽く、
紡花紗袴薄於雲。紡花の紗袴雲よりも薄し。
莫嫌輕薄但知著。輕薄を嫌ふこと莫く但著ることを知れ、
猶恐通州熱殺君。猶恐らくは通州君を熱殺せんことを。

【題義】夏著を通州に居る元稹に贈るについて、其封包の上に書きつけた詩である。

【詩意】薄色の絹縮の上衣は霧よりも軽く、花の模様を織り出した紗の袴は雲よりも薄い。軽く薄きを嫌はず著てくれよ。通州の暑熱がさぞ君を惱ますであらうから。

白牡丹

白花冷淡無人愛。白花冷淡人の愛する無きも、
亦占芳名道牡丹。亦芳名を占めて牡丹と道ふ。
應似東宮白贊善。應に東宮の白贊善の、
被人還喚作朝官。人に還朝官と喚び作さるるに似たるべし。

【字解】(一)冷淡、淡拍で見ばえのないこと。

(二)東宮、皇太子。白贊善は太子左贊善大夫白樂天。

【題義】 白い花の咲く牡丹のことを述べた詩である。
 【詩意】 白い花は淡泊で見えがないので人から珍重せられないが、それでも花は花であるから牡丹の名を冒してゐる。丁度この太子左贊善大夫たる白居易でも、やはり人並に朝官と喚ばれてゐるやうなものだ。

夢 舊

舊を夢む

別來老大苦修道。別來老大苦に道を修す、
 鍊得離心成死灰。鍊り得て離心死灰と成る。
 平生憶念消磨盡。平生憶念消磨し盡きぬ、
 昨夜因何入夢來。昨夜何に因りてか夢に入つて來れる。

【題義】 往日の事を夢に見て作つた詩である。

【詩意】 別れて以來老書生になつて大に道教を修行し、精神を鍛鍊した結果、離別を悲む心も死灰のやうになつた。平生何等の憶念もないのに、なぜ昨夜は昔の事を夢に見たのであらう。

戲題盧祕書新移薔薇

戲に盧祕書が新に移せる薔薇に題す

風動翠條腰嫋娜。風は翠條を動かして腰嫋娜、
 露垂紅蓼淚闌干。露は紅蓼に垂れて淚闌干。
 移他到此須爲主。他を移して此に到りて須らく主と爲るべし、
 不別花人莫使看。花を別たざる人には看しむる莫れ。

【字解】 一 翠條 緑の枝。兩

是はしなやかな貌。

二 闌干 涙の流るる貌。

【題義】 戲に盧祕書が新に移した薔薇の花に題した詩である。

【詩意】 風は緑の枝を動かして美人の腰のやうにしなやかである。露は紅の花房に垂れて涙の流れるやうである。此花を移し植ゑて主人公となり、花を識別することの出来ない人には見せぬがよい。

曲江夜歸聞元八見訪

曲江より夜歸り、元八の訪はれしを聞く

自入臺來見面稀。臺に入りてより來面を見ること稀なり、
 班中遙得揖容輝。班中遙に容輝に揖することを得たり。
 早知相憶來相訪。早く知る相憶ひて來りて相訪へるを、
 悔待江頭明月歸。悔ゆるらくは江頭の明月を待ちて歸りしを。

【字解】 一 曲江 前に見ゆ。

二 臺 御史臺。役所の名。元八

の侍御史たること前に見ゆ。

三 班中 己の席次。官列。容輝

は元八の容貌。

【題義】 曲江から夜自宅に歸り、留守中に元八の來り訪ひし由を聞いて作つた詩である。

律詩 夢舊 戲題盧祕書新移薔薇 曲江夜歸聞元八見訪

【詩意】君が侍御使になつてからは相見ること稀になり、ただ僕の役所から遙に君の姿を拜するばかりだ。君が僕の留守中に僕を憶うて來り訪ひし由を聞き、曲江に月の出るまで避んでゐたのを悔いた。

苦熱題恆寂師禪室

熱に苦み、恆寂師の禪室に題す

人人避暑走如狂 人人暑を避け走りて狂するが如し、

【字解】「一」禪房 禪室。

獨有禪師不出房 獨禪師の房を出でざる有り。

可是禪房無熱到 是れ禪房に熱の到ること無かる可けんや、

但能心靜即身涼 但能く心靜なれば即ち身涼し。

【題義】暑氣に苦み恆寂師の禪室に題した詩である。

【詩意】人人皆暑を避けて狂奔してゐるのに、禪師は禪房にひきこもつて行ひすましてゐる。禪房に暑氣が侵入せぬ譯ではなく、ただ心が靜かであるから身も涼しいのであらう。

微之到通州日授館未安見塵壁間有數行字

讀之即僕舊詩其落句云綠水紅蓮一朵開千

花百草無顏色然不知題者何人也微之吟歎

不足因綴一章兼錄僕詩本同寄省其詩乃是

十五年前初及第時贈長安妓人阿軟絕句緬

思往事杳若夢中懷舊感今因酬長句

微之通州に到りし日、館を授けられて未だ安んぜず、塵壁の間を見るに數行の字あり。之を讀めば即ち僕の舊詩なり。その落句に云く、綠水紅蓮一朵開、

千花百草無顏色と。然れども題する者の何人なるを知らざるなり、微之吟歎すれども足らず、因つて一章を綴り、僕の詩本に兼ね録して同じく寄す、其詩を省るに、乃ち是れ十五年前、初めて及第せし時、長安の妓人阿軟に贈りし絶句なり。緬に往事を思ふに、杳として夢中の若し。舊を懐ひ今に感じ、因つて長句を酬ゆ

十五年前似夢遊 十五年前夢遊に似たり、

曾將詩句結風流 曾て詩句を將て風流を結ぶ。

偶助笑歌嘲阿軟 偶々笑歌を助けて阿軟を嘲る、

【字解】「一」青衫司馬 青衫は司馬の服。司馬は官名。時に元稹は通州司馬であつた。

律詩 苦熱題恆寂師禪室 微之到通州日授館未安懷舊感今因酬長句

可知傳誦到通州。知る可し傳誦せられて通州に到りしを。
 昔教紅袖佳人唱。昔は紅袖の佳人をして唱へしめ、
 今遣青衫司馬愁。今は青衫の司馬をして愁へしむ。
 惆悵又聞題處所。惆悵して又聞く題する處の所、
 雨淋江館破墻頭。雨は淋ぐ江館破墻の頭。

江館 江邊の官舎。通州司馬の館を指す。

【題義】元稹の通州（今の四川省東川道）司馬となりて官舎に入るや、塵壁の間に數行の文字あるを見た。それは余の舊詩であつた。その落句（轉結二句）に綠水紅蓮一朶開、千花百草無顏色とある。誰か壁に題したのかはわからない。元稹は吟嘆して尙ほ足れりとせず。余の詩本に書き添へて余に寄せた。余因つて其詩を回想するに、十五年前初めて及第した時、長安の妓女の阿軟といふ者に贈つた絶句である。今から昔を思へば全く夢のやうである。因つて感懐を書して七律一首となし、之を元稹に酬いた。

【詩意】今から思へば十五年前の事はまるで夢のやうだ。その頃詩句を以て風流の縁を結んだこともあつた。偶々笑歌の資として阿軟をひやかした詩が、いつしか傳誦せられて通州まで傳つたと見える。昔は美人の口の端に上つたのが、今は通州司馬の愁の種となつた。おまけに通州司馬は其官舎の破墻の頭に、悲の心を抱いて雨の降る音を聞いてゐるとは、實に今昔の感に堪へない。

得微之到官後書備知通州之事。悵然有感。因成四章。

微之が官に到りし後の書を得て、備に通州の事を知り、悵然として感あり、因つて四章を成す

來書子細說通州。來書子細に通州を説く。
 州在山根峽岸頭。州は山根峽岸の頭に在り。
 四面千重火雲合。四面千重火雲合ひ、
 中心一道瘴江流。中心一道瘴江流る。
 蟲蛇白晝攔官道。蟲蛇は白晝官道を攔り、
 蚊蚋黃昏撲郡樓。蚊蚋は黃昏郡樓を撲つ。
 何罪遣君居此地。何の罪ありてか君をして此地に居らしむる、
 天高無處問來由。天高くして來由を問ふに處無し。

【字解】
 ① 火雲 夏日の雲。
 ② 一道 一筋。瘴江は毒氣を含んだ川。
 ③ 郡樓 州廳。

【題義】元稹が通州に著いてからの手紙によつて、詳細に通州の様子がわかつた。因つて心を悲ましめ、四首の詩を作つた。

【詩意】君の手紙に巨細に通州の様子が書いてある。それに因つて見ると通州は山の麓の峽の頭に在

つて、四方を見れば火のやうな雲が山又山を圍み、その真中に一筋の瘴江が流れ、蟲や蛇が盡も官道を通り、夕方になれば蚊軍が州廳まで侵入する。誠に厭な處だ。一體何罪があつて君をこんな處に置くのであらうか。天に問はうとしても天は茫茫として其來由を聞くことが出来ない。

【二】

匿匠巖山萬仞餘

匿匠せる巖山萬仞餘

人家應似甌中居

人家應に甌中に居るに似たるべし。

寅年籬下多逢虎

寅年籬下多く虎に逢ひ、

亥日沙頭始賣魚

亥日沙頭始めて魚を賣る。

衣斑梅雨長須熨

衣斑にして梅雨長く須らく熨すべし、

米澀畚田不解鉏

米澀りて畚田鉏を解かず。

努力安心過三考

努力安心して三考を過ぎよ、

已曾愁殺李尚書

已に曾て李尚書を愁殺せしむ。

李尚書、先貶三州、身歿於彼處。

【二】

【字解】 【二】 匿匠 周匝なり。

【三】 亥日 洪氏職方集に「嶺南の村落に市あり、之を虛といふ。その常に會せず虚日多きを以てなり。西蜀には瘴といふ。瘴疾の聞えて復作るが如きを言ふ。江南には疾を以て稱するを惡み、因つてただ亥といふことある。市場の開く日。【三】 畚田 新に開墾した田地。【三】 三考 官吏の功績を考査すること。書經舜典に「三載績を考へ、三考して幽明を黜陟す」とある。【三】 李尚書 名は實、嘗て通州に貶せられ、通州で死

んだ。愁殺の殺は助辭で意味はない。

【詩意】 高い山が四方を圍んでゐるので、家の中にあると甌の中にあるやうに蒸し暑く、寅年には籬の下まで虎が潛み來り、市場の開ける日にのみ沙頭で魚を賣る。梅雨の時には着物が霽びて熨斗をかけねばならぬやうになり、收穫が乏しいので百姓は絶えず耕作せねばならない。君も心を安んじ職務に努めて首尾よく考査を通過し、早く別な處へ轉任になるやうにするがよい。そこは曾て李尚書をして愁へしめた處だから。

【三】

人稀地僻醫巫少

人稀に地僻にして醫巫少し、

夏早秋霖瘴瘧多

夏は早し秋は霖して瘴瘧多し。

老去一身須愛惜

老い去りて一身須らく愛惜すべし、

別來四體得如何

別來四體如何なるを得たる。

侏儒飽笑東方朔

侏儒は飽きて東方朔を笑ひ、

蕙苴讒憂馬伏波

蕙苴讒せられて馬伏波を憂へしむ。

【三】

【字解】 【二】 醫巫 藥を以て病を除くを醫といひ、神に禱りて病を除くを巫といふ。【三】 瘴瘧 瘴疫。

【三】 別來 別れて以來。四體は身體。【三】 侏儒 一寸法師、君側に仕へて伎藝を演ずる賤臣。漢書東方朔傳に「侏儒は長三尺にして俸は一囊の粟。臣朔は長九尺なるも亦一囊の粟なり。侏儒は飽きて死せんと欲し、臣朔は飢みて死せんと欲す」とあり。

莫遣沈愁結成病。沈愁をして結びて病と成らしむる莫れ、

時時一唱濯纓歌。時時一唱せよ濯纓の歌。

【詩意】通州は住む人も稀に地も偏鄙で醫者なども少いが、夏は早が續き秋は長雨が降つて、悪疫が多い。年を取つては身體を大事にしなればいかぬが、別れてから君の健康はどうだ。今やつまらぬ奴がはびこり、兎もすれば讒謗を被る虞がある。君もよくよして病氣などにならぬやうに、たまには濯纓の歌でも歌つて氣を霽らすがい。

【字解】(一) 恠性 人を憂へしめること。(二) 人間 世間。冗長は餘計なもの。むだなもの。

〔四〕

〔四〕

通州海内恠惶地。通州は海内恠惶の地、

司馬人間冗長官。司馬は人間冗長の官。

傷鳥有弦驚不定。傷鳥弦有り驚きて定らず、

臥龍無水動應難。臥龍水無く動くこと應に難かるべし。

【詩意】通州は天下中の厭な土地で、司馬は世間で幅のきかぬ官である。況んや傷鳥の弓弦の音にも驚くが如く、常に讒を恐れ、才能を振はうとすれば後援者もなく、水のない龍の如くである。偉才を抱いて沈淪してゐるが誰も引立ててくれる者はなく、霜中の松の如く節操を守つてゐるが人皆冷視して顧みない。目を舉げて長安の都を見れば、つまらぬ奴が高車肥馬を驅りて時めいてゐる。どうして悲嘆せずにもられようか。

劍埋獄底誰深掘。劍は獄底に埋もれて誰か深く掘らん、

松偃霜中盡冷看。松は霜中に偃して盡く冷に看る。

舉目爭能不惆悵。目を舉げて争か能く惆悵せざらん、

高車大馬滿長安。高車大馬長安に滿つ。

【詩意】通州は天下中の厭な土地で、司馬は世間で幅のきかぬ官である。況んや傷鳥の弓弦の音にも驚くが如く、常に讒を恐れ、才能を振はうとすれば後援者もなく、水のない龍の如くである。偉才を抱いて沈淪してゐるが誰も引立ててくれる者はなく、霜中の松の如く節操を守つてゐるが人皆冷視して顧みない。目を舉げて長安の都を見れば、つまらぬ奴が高車肥馬を驅りて時めいてゐる。どうして悲嘆せずにもられようか。

【字解】(一) 恠性 人を憂へしめること。(二) 人間 世間。冗長は餘計なもの。むだなもの。

病中答招飲者

病中、招飲せんとする者に答ふ

願我鏡中悲白髮。我を願るに鏡中白髮を悲む、

儘君花下醉青春。儘君花下青春に醉ふ。

不縁眼痛兼身病。眼痛と身病とに縁らずんば、

律詩 得微之判官後書備知通州之事悵然有感因成四章 病中答招飲者

可_レ是樽前第二人。是_レ樽前第二の_レ人なるべけんや。

【題義】樂天を招いて酒を飲まんとする者あり、樂天は病の爲に之を断つたのである。

【詩意】我は鏡に照して白髪を悲んでゐるが、君は花の下で酒を飲み大に青春を樂まうとする。眼痛や病氣さへなければ、年は取つても酒では第二には下らないのだが、遺憾ながら病氣で馳せ參するこゝとが出来ない。

鷺子樓 三首并序

鷺子樓 三首并に序

徐州故張尙書有愛妓曰盼盼善歌舞雅多風態予爲校書郎時遊徐泗間張尙書宴予酒酣出盼盼以佐歡歡甚予因贈詩云醉嬌勝不得風煽牡丹花盡歡而去爾後絕不相聞迨茲僅一紀矣昨日司勳員外郎張仲素績之訪予因吟新詩有燕子樓三首詞甚婉麗詰其由爲盼盼作也績之從事武寧軍累年頗知盼盼始末云尙書既沒歸葬東洛而彭城有張氏舊第第中有小樓名燕子盼盼念舊愛而不嫁居是樓十餘年幽獨塊然于今尙在予愛績之新詠感彭城舊遊因同其題作

三絕句

【調讀】徐州の故張尙書に愛妓有り、盼盼と曰ふ。歌舞を善くし、雅より風態多し。予校書郎たりし時徐泗の間に遊ぶ。張尙書を宴し、酒酣なるととき盼盼を出して以て歡を佐けしむ。歡ふこと甚し。予因りて詩を贈りて云ふ、醉嬌勝へ得ず、風は煽す牡丹の花と。歡を盡して去る。爾後絶えて相聞かず。茲に迨びて僅に一紀なり。昨日司勳員外郎張仲素績之予を訪ひ、因つて新詩を吟す。燕子樓三首有り。詞甚だ婉麗なり。其由を詰るに盼盼の爲に作るなり。績之は武寧軍に從事たること累年、頗る盼盼が始末を知れり。云く尙書既に没して東洛に歸葬す。而して彭城に張氏が舊第有り、第中に小樓有りて燕子と名く。盼盼舊愛を念ひて嫁せず、是樓に居ること十餘年なり。幽獨塊然、今に尙在りと。予績之の新詠を愛し、彭城の舊遊に感ず。因つて其題に同じて三絶句を作る。

【字解】【一】徐州 古の九州の一。故張尙書は張建封の子情なり。徐州刺史に官す。徐に在ること七年治績多し。元和の初召されて工部尙書となり、未だ塊を驗えずして卒す。【二】徐泗 地名。【三】一紀 十二年。【四】張仲素 名は績之、字は仲素。【五】從事 官名。【六】東洛 洛陽。【七】彭城 張情の治所。【八】塊然 孤獨の貌。

【題義】故の徐州刺史張情の愛妓盼盼に代つて寡居の苦況を述べた詩である。

滿窓明月滿簾霜 滿窓の明月滿簾の霜

律詩 鷺子樓三首并序

被冷燈殘拂臥牀。被冷かに燈殘して臥牀を拂ふ。

燕子樓中霜月夜。燕子樓中霜月の夜。

秋來只爲一人長。秋來只一人の爲に長し。

【題義】秋深けて唯明月の光や寒霜の色が燈も小暗く夜著も冷い獨寢の床にさし込み、燕子樓中に寡居してゐると、つくづく夜の長さを感ずる。

【餘論】「月見ればちちに物こそ悲しけれ、我身ひとつの秋にはあらねど」の歌と同じ趣である。

〔一〕

〔二〕

鈿暈羅彩色似煙。鈿暈羅彩色煙に似たり。

幾回欲著即潛然。幾回か著せんと欲して即ち潛然。

自從不舞霓裳曲。霓裳の曲を舞はざりしより。

疊在空箱十一年。疊みて空箱に在ること十一年。

【詩意】鈿は暈の如く薄絹の上衣は煙のやうで昔と變らない。幾度か著て見ようとは思つたが、亡き尙書の事を思ひ出し涙が流れて果さない。尙書の世に在りし時は此を着て霓裳の曲を舞うたのであつたが、それも昔の夢となり、今は空しく疊んで箱中に藏すること早や十一年になつた。

【餘論】「かたみこそ今はあだなれ此なくば、忘るることもあらましもを」といふ歌と、同じ趣向である。

〔三〕

〔四〕

今春有客洛陽回。今春客有り洛陽より回る。

曾到尙書墓上來。曾て尙書が墓上に到りて來る。

見說白楊堪作柱。見説く白楊柱と作すに堪へたり。

爭教紅粉不成灰。争か紅粉をして灰と成らざらしむる。

【詩意】今春洛陽から歸つた客があつて、尙書の墓參もして來たさうだ。その客の言ふ所に由れば、今や尙書が墓の白楊樹は柱ぐらゐの太さになつてゐるさうだが、なせ吾は惜しからぬ命を長らへてゐるのであらう。

【餘論】唐宋詩醇に「一唱三嘆、餘音梁を繞る。此の如き風調、王昌齡・李白の輩を起して之を爲らしむと雖も、何を以てか復加へん」と激賞してある。

【字解】〔一〕洛陽 尙書を葬つた處。

〔二〕白楊 墓に植ゑてある木。

〔三〕紅粉 美人、即ち野野自ら喩ふ。

感故張僕射諸妓

故の張僕射の諸妓に感ず

黄金不惜買蛾眉。黄金惜ますして蛾眉を買ふ、
揀得如花三四枝。揀び得たり花の如し三四枝。
歌舞教成心力盡。歌舞教成つて心力盡く、
一朝身去不相隨。一朝身去つて相隨はず。

【字解】(一) 蛾眉 美人をいふ。

【題義】 故の張僕射(張愔なり。前の詩に見ゆ)の諸妓に感じて作つた詩である。

【詩意】 金を惜まずに美妓を買ひ取り、花の如き者三四人を擇び得た。心力を盡して歌舞を教へ、まアこれでよいといふ處で張僕射は死んでしまつて、黄泉の御伴をする者としては一人もない。馬鹿馬鹿しいことだ。

【餘論】 堯山堂外紀に云はく、此詩は盼盼を諷するが爲にして作る。盼盼詩を得て反覆して之を讀み、泣いて曰はく、我が公堯背してより妾死する能はざるに非ず。百載の後、人我が公色を重んじ從死の妾ありと以はんことを恐る。是れ我が公の清範を玷すなりと。乃ち白公の詩に答へて曰はく、自守空房恨斂眉、形同春後牡丹枝、舍人不會人深意、訝道泉臺不_二去隨_一、と。旬日食はずして死せりと。

初貶官過望秦嶺

自此後詩、江州路上作。

初めて官を貶せられて望秦嶺を過ぐ 此より後の詩は江州路上の作。

草草辭家憂後事。草草家を辭して後事を憂ふ、
遲遲去國問前途。遲遲國を去りて前途を問ふ。
望秦嶺上回頭立。望秦嶺上頭を回らして立てば、
無限秋風吹白鬚。無限き秋風白鬚を吹く。

【字解】(一) 草草 せわしく、

(二) 遲遲 とぼとぼと、歩みのおそいこと。

【題義】 初めて江州司馬に貶せられ、赴任の途中望秦嶺を過ぎて作つた詩である。

【詩意】 せわしく家を去り後事を憂へつつ、とぼとぼと長安の都を見捨てた。望秦嶺の上から頭を回らして長安の方を見れば、秋風が我が白鬚を吹いて息まない。

藍橋驛見元九詩

詩中云、江陵歸時逢春雪。

藍橋驛にて元九の詩を見る 詩中に曰く、江陵より歸る時春雪に逢ふと

藍橋春雪君歸日。藍橋の春雪は君が歸る日、

【字解】(一) 藍橋 陝西省藍田

律詩 感故張僕射諸妓 初貶官過望秦嶺 藍橋驛見元九詩

秦嶺秋風我去時。秦嶺の秋風は我が去る時。

每到驛亭先下馬。驛亭に到る毎に先づ馬を下り、

循牆遠柱覓君詩。牆に循ひ柱を逸りて君が詩を覓む。

嶺の東南の驛名。
【三】秦嶺 山脈の名。

【題義】藍橋驛で嘗て元稹の題した詩を見て作つたのである。

【詩意】嘗て君は江陵から歸る時に藍橋驛で春雪に逢つたさうだが、今僕は江州に赴任せんとして秦嶺で秋風に逢うた。宿場に著く毎に先づ馬から下り、牆や柱をまはつて君の題詩がありはせぬかと捜してゐる。

韓公堆寄元九 韓公堆にて元九に寄す

韓公堆北瀾西頭。韓公堆北瀾の西頭、

冷雨涼風拂面秋。冷雨涼風面を拂ふ秋。

努力南行少惆悵。努力南行して惆悵少し、

江州猶似勝通州。江州は猶通州に勝るに似たり。

【字解】【一】江州 樂天の貶せられて行く處。通州は元稹の貶せられてゐる處。

【題義】韓公堆で元稹に寄せた詩である。

【詩意】吾今、江州に赴く途中の韓公堆の北、韓公瀾の西にさしかかつた所が、丁度雨風の涼しい秋に逢うた。努力して南方に行くが、格別悲しみもない。江州は君の居る通州よりは餘程よいやうだから。

發商州 商州を發す

商州館裏停三日。商州館裏停ること三日、

待得妻孥相逐行。妻孥を待ち得て相逐うて行く。

若比李三猶自勝。若し李三に比すれば猶自ら勝らん、

兒啼婦哭不聞聲。兒啼婦哭聲を聞かず。

【字解】【一】妻孥 妻子。
【二】李三 三は排行。李國言なり。

時李國言新歿。

【題義】商州を發する時作つた詩である。

【詩意】商州の驛館に三日逗留し、妻子の來るのを待つて、連れ立つて行くことにした。貶せられて行くのではあるが李三に比べるとまだましである。妻子の泣き悲む聲は聞かなくてすむから。(時に李三は死んだのである。)

武關南見元九題山石榴花見寄

武關の南にて元九が山石榴花に題して寄せられしを見る

往來同路不同時、往來路を同うして時を同うせず、前後相思兩不知、前後相思ふも兩ながら知らず。行過關門三四里、行きて關門を過ぐること三四里、榴花不見見君詩、榴花をば見ずして君の詩を見る。

【字解】(一) 山石榴、ヤマツツジ。

【題義】武關(關所の名)の南で元稹が山鄧闕の花に題する詩を寄せられたのを見て此詩を作つたのである。

【詩意】君は嘗て來り我は今往く。(前の藍橋驛見元九詩(參照)道は同じだけれども時節は同じではない。されば互に相思うても互に知らずに居る。現に今自分は武關を過ぎて三四里進んだが、山鄧闕の花などは見えず、ただ君の山鄧闕に題した詩を見るのみだ。

紅鸚鵡 商山路逢

紅鸚鵡 商山路

安南遠進紅鸚鵡

安南より遠く進む紅鸚鵡

【字解】(一) 安南、南方の國の

色似桃花語似人

色は桃花に似て語は人に似たり。

文章辯慧皆如此

文章辯慧皆此の如し。

籠檻何年出得身

籠檻何れの年か身を出し得ん。

【題義】商山路で紅鸚鵡に逢ひ、感ずる所ありて此詩を作つた。

【詩意】安南から遙遙紅鸚鵡を獻進するが、其色は桃花の如く其語は人の如くである。羽毛も美しく賢くもあるのに、惜しいかな籠の中に入れられてある。いつになつたら自由の身になれるであらう。吾身につまされて同情に堪へない。

名。

【一】文章、羽毛の綺麗なこと。辯、

辯は賢いこと。

【二】籠檻、鳥籠。

題四皓廟

四皓の廟に題す

臥逃秦亂起安劉、臥しては秦の亂を逃れ起ちては劉を安し、舒卷如雲得自由、舒卷雲の如く自由を得たり。「んず、若有精靈應笑我、若し精靈有らば應に我を笑ふべし、不成一事謫江州、一事を成さずして江州に謫せらる。

逃れ難れ、漢の臣とならず。上此四人を招致せんとすれども能はず。今太子をして此四人を招致せしめば則ち一助なりと。因つて

律詩 武關南見元九題山石榴花見寄 紅鸚鵡 題四皓廟

【字解】(一) 四皓、東園公・綺

里季・夏黃公・冉里先生をいふ。漢

の威姫高祖に寵あり、趙王如意を生

む。高祖太子を廢して如意を立てん

と欲す。呂后深く之を憂へて計を張

良に問ふ。良曰く、四皓は商山中に

太子をして此四人を招かしむ。四人來りて太子に侍す。高祖乃ち太子を廢するをなさず。【三】安劉、劉は漢の姓。太子を廢する計をやめさせたこと。【二】野老、進退出處。

【題義】 商山の四皓の廟に題した詩である。

【詩意】 隱通しては秦の亂を避け、出でては漢室を安んじた。その出處進退は實に雲の如く自由である。若し今尙四皓の精魂が存するならば必ず我を笑ふであらう。何事をも成し得ずして江州に謫せられるのだから。

罷藥

藥を罷む

自學坐禪休服藥、坐禪を學びてより藥を服するを休む、
從他時復病沈沈、從他時に復病の沈沈たらんことを。
此身不要全強健、此身全く強健なることを要めず、
強健多生人我心、強健なれば多く人我の心を生ず。

【字解】 【一】從他、まよふこと。うてもよいとの意。沈沈は深くこもること。

【三】人我心、私慾の心。

【題義】 藥を飲むことを罷めたといふのである。

【詩意】 坐禪を學び始めてから藥を飲むのを罷めた。病氣が復體中に潜ひとも、勝手にさせようと思ふ。

ふ。此身の全然健康ならんことは敢て求めない。強健であると私慾の心が起るから。

白鷺

白鷺

人生四十未全衰、人生四十未だ全く衰へず、
我爲愁多白髮垂、我は愁多きが爲に白髮垂る。
何故水邊雙白鷺、何の故ぞ水邊の雙白鷺、
無愁頭上亦垂絲、愁無きも頭上亦絲を垂る。

【題義】 白鷺を見て感慨を述べた詩である。

【詩意】 人は四十ぐらゐでは全く衰へたといふ程ではないが、我は愁が多いので既に白髪になつた。見れば水邊に二羽の白鷺があるが、あれは愁もないのになせか頭が白い。

襄陽舟夜

襄陽舟夜

下馬襄陽郭、移舟漢陰驛、馬より下る襄陽の郭、舟に移る漢陰の驛。

秋風截江起。寒浪連天白。秋風江を截りて起り、寒浪天に連りて白し。
本是多愁人。復此風波夕。本是れ愁多き人、復此れ風波の夕。

【字解】(一) 襄陽 湖北省襄陽縣。(二) 漢陰 漢水の南。陰は川の時は南なり。

【題義】襄陽で舟中にゐて作つた詩である。

【詩意】襄陽驛で馬から下りて舟に乗り移つた。折しも秋風が江を渡つて來り、大浪が天を拍つて白い。我は本來多恨の身であるのに、かかる風波の烈しい夕には一層愁が増すばかりである。

江夜舟行

江夜舟行

煙澹月濛濛。舟行夜色中。煙澹くして月濛濛たり、舟は行く夜色の中。
江鋪滿槽水。帆展半檣風。江は滿槽の水を鋪き、帆は半檣の風に展ぶ。
叫曙嗽嗽鴈。啼秋唧唧蟲。曙に叫ぶ嗽嗽たる鴈、秋に啼く唧唧たる蟲。
只應催北客。早作白鬚翁。只應に北客を催し、早く白鬚の翁と作すなるべし。

【字解】(一) 濛濛 ぼんやりしてゐる。(二) 嗽嗽 鴈の鳴く聲。(三) 唧唧 蟲の聲。(四) 北客 樂天自ら謂ふ。

【題義】夜江上を舟行した景況を述べた詩である。

【詩意】薄く煙がかかつて月の朧に霞む時、舟で江上を行けば、江水が漫漫と漲つて波穩かに、秋風が半帆に入つて展開してゐる。明け方になつて鴈の聲や蟲の音が繁く聞える。丁度北客をして愁心を催さしめ、早く白鬚の老翁とならしめんとしてゐるものやうだ。

紅藤杖

紅藤杖

交親過澹別。車馬到江廻。交親澹を過ぎて別れ、車馬江に到りて廻る。
唯有紅藤杖。相隨萬里來。唯紅藤の杖のみ有り、相隨ひて萬里に來る。

【字解】(一) 交親 親交ある人。澹は關中八川の一。

【題義】藤の杖のことを述べた詩である。

【詩意】長安を去る時、親友たちは澹水の處まで我を見送つてくれたが、そこで別れて歸り、車馬は長江の處まで我を載せて來たが、そこから引返した。ただ此紅藤杖だけは我に伴つて萬里の遠きに及んだ。

江上吟元八絕句

江上にて元八が絶句を吟す

大江深處月明時 大江深き處月明かなる時、

一夜吟君小律詩 一夜君が小律詩を吟す。

應有水仙潛出聽 應に水仙有りて潛に出でて聽くべし、

翻將唱作步虛詞 翻して將に唱へて步虛の詞を作らんとす。

【題義】江上で元八（前に見ゆ）の作つた絶句を吟じたことを述べた詩である。

【詩意】長江の明月の下で、元君の作つた絶句を吟じた。恐らく水中の仙人が潛に出でて聽き、其聲を寫して步虛詞を作るであらう。

【字解】【一】小律詩 絶句なり。

【二】水仙 水中の仙人。

【三】翻 卷十二、琵琶行に見ゆ。步虚詞 仙人の歌。

途中感秋

途中秋に感す

節物行搖落年顔坐變衰 節物行くゆく搖落し、年顔坐ながら變衰す。

樹初黃葉日人欲白頭時 樹初めて黃葉する日、人白頭ならんと欲する時。

鄉國程程遠親朋處處辭 鄉國程程遠く、親朋處處に辭す。

唯憐病與老一步不相離 唯憐む病と老と、一步も相離れず。

【字解】【一】節物 時節の草木。搖落はゆられおつること。【二】程程 道里なり。

【題義】江州に往く途中で秋に感して作つた詩である。

【詩意】眼前の景物は行くゆく衰へ、我が容貌もいつとはなしに老い、木々は黄葉し、我は白髪ならんとし、郷里は道遠く、親朋は離散してゐる。ただ我が身につき纏つて離れぬものは病と老とのみである。誠に物悲しい時節である。

登郢州白雪樓

郢州の白雪樓に登る

白雪樓中一望郷 白雪樓中一たび郷を望めば、

青山簇簇水茫茫 青山簇簇水茫茫。

朝來渡口逢京使 朝に渡口に來りて京使に逢ふ、

說道煙塵近洛陽 說道らく煙塵洛陽に近しと。

時惟西寇未平。

【題義】郢州の白雪樓に登つて作つた詩である。

【詩意】白雪樓に登つて郷里の方を望めば、山はむらがり聳え川は茫茫としてゐる。朝起きて渡場に

【字解】【一】郢州 湖北省鍾祥縣治。

【二】簇簇 むらがり變ゆること。茫茫は漠然として定かならぬ貌。

【三】渡口 わたしば。

【四】煙塵 兵塵といふが如し。

律詩 江上吟元八絶句 途中感秋 登郢州白雪樓

來て偶然長安から來た使に逢つた所が、淮西の謀叛軍が追追洛陽の近くに迫つて來たと言つてみた。賦に悲むべきことだ。

舟夜贈内

舟夜内に贈る

三聲猿後垂郷涙、
一葉舟中載病身。
莫凭水窓南北望、
月明月闇總愁人。

【題義】夜舟中で妻に贈つた詩である。

【詩意】一葉の扁舟に病身を載せて他郷にさまよつてゐると、三聲猿の啼くのを聞けば忽ち郷里を思ふ涙を流す。舟の窓に凭つて南北を望むのは禁物である。月が明るくても暗くても我をして愁へしめるから。

【餘論】樂天は妻子を連れて江州に赴任したらしいから(前の發商州の詩参照)妻も多分同じ舟に乗つてゐたのであらう。

逢舊

舊に逢ふ

我梳白髮添新恨、
君掃青蛾減舊容。
應被傍人怪惆悵、
少年離別老相逢。

【字解】一 青蛾 青き美人の眉。

【題義】若い時に識り合つた女に逢うて作つた詩である。

【詩意】我は白髪を梳つて老衰を恨む情を増し、君はいくら眉を畫いても以前のやうな美しさはなくなつた。傍の人はお互に悲んでゐるのを不思議に思ふであらうが、若い時に別れて久し振りで逢つたのだから無理もあるまい。

白口阻風十日

白口にて風に阻てらるること十日

洪濤白浪塞江津、
處處連廻事事連。
世上方爲失途客、

【字解】一 洪濤白浪 大浪。
二 連廻 めぐりまはる。事事連 すべて事がすらすらと連げない

律詩 舟夜贈内 逢舊 白口阻風十日

江頭又作阻風人。江頭又風に阻てらるる人と作る。
 魚蝦遇雨腥盈鼻。魚蝦雨に遇ひて腥鼻に盈ち、
 蚊蚋和煙癢滿身。蚊蚋煙に和して癢身に滿つ。
 老大光陰能幾日。老大光陰能く幾日ぞ、
 等閒白口坐經旬。等閒白口坐して旬を經。

【三】等閒 ばんやりと爲す事もな
く日を送ること。

【題義】白口といふ處で波風の荒い爲に舟止に逢つて空しく十日を過したことを述べた詩である。
 【詩意】大浪の爲に舟着場が塞がれて、處處にまはり道をして手間取つた。我は既に世間の落伍者であるが、今又風の爲に舟止を食つた。舟に積んである魚類などは腐つて惡臭を發し、蚊が滿身を食つて痒くてたまらない。老いて先の短い身が十日を手持無沙汰に暮してしまつた。

浦中夜泊

浦中夜泊

暗上江隄還獨立。暗に江隄に上りて還獨立てば、
 水風霜氣夜稜稜。水風霜氣夜稜稜。
 回看深浦停舟處。深浦の舟を停めし處を回看すれば、

【字解】【一】江隄 江岸。
 【三】稜稜 寒氣の身に沁む貌。

蘆荻花中一點燈

蘆荻花中一點の燈

【題義】浦曲に夜舟を泊したことを述べた詩である。
 【詩意】暗中江岸の上つて獨立つてみると、水上から吹いて來る風や霜氣が身に沁みて寒い。舟を停めてある處をふりかへつて見れば、蘆や荻の白い花の中に一點の燈が淋しく見える。

盧侍御與崔評事爲予於黃鶴樓置宴宴罷同望

盧侍御と崔評事と、予が爲に黃鶴樓に於て宴を置、宴罷みて同じく望む

江邊黃鶴古時樓。江邊の黃鶴古時の樓、
 勞置華筵待我遊。勞して華筵を置き我を待ちて遊ばしむ。
 楚思森茫雲水冷。楚思森茫として雲水冷に、
 商聲清脆管絃秋。商聲清脆なり管絃の秋。
 白花浪濺頭陀寺。白花浪は濺ぐ頭陀寺、
 紅葉林籠鸚鵡洲。紅葉林は籠む鸚鵡洲。
 總是平生未行處。總是是れ平生未だ行かざりし處

【字解】【一】黃鶴樓 今の湖北
省武昌縣の西南に在り、昔費文禱が
登仙した處で、景勝を以て古來有名
である。
 【三】勞 旅愁をれきらふこと。
 【四】楚思 此地は古の楚地である。
 【五】商聲 哀調なり。
 【六】頭陀寺 寺の名。
 【七】鸚鵡洲 黃鶴樓の附近に在る
洲の名。

醉來堪賞醒堪愁。醉ひ來りては賞するに堪へ醒めては愁ふるに堪へたり。

【題義】盧侍御と崔評事とが樂天の爲に黃鶴樓で宴を催した。その宴が終つてから樓に登つて一緒に四方を眺めて作つた詩である。

【詩意】長江の邊に在る此樓は、昔から名高い黃鶴樓である。今盧侍御と崔評事とが我が旅の疲れを慰めん爲に此樓に盛宴を張つてくれた。樓上から凝望したる雲水の冷なるを見ては感慨を起し、管絃の柔に澄んだ聲を聞いては秋の哀れを催した。白い花の如き浪が頭陀寺に漲ぎ、紅葉の林が鸚鵡洲を籠めてゐるなど、總てまだ見ぬ景色であるから、酔うてゐる中は賞玩したが、醒めては皆旅愁の種になつた。

舟中讀元九詩

舟中、元九の詩を讀む

把君詩卷燈前讀。君が詩卷を把りて燈前に讀む、
詩盡燈殘天未明。詩盡き燈殘して天未だ明けず。
眼痛滅燈猶闇坐。眼痛み燈を滅して猶闇坐すれば、
逆風吹浪打船聲。逆風浪を吹いて船を打つ聲。

【題義】舟の中で元九の詩卷を讀んだことを述べた詩である。

【詩意】君の詩卷を燈前に讀み、讀み終り燈も滅えさうになつたがまだ夜は明けない。眼が痛いので燈を消し暗中に黙坐し、風浪の船を打つ聲を聞いて凄涼の感を深うした。

【餘論】唐宋詩醇に「字字沈著、二十八字の中無限に層折す。元微之の聞樂天左降江州詩に云はく、殘燈無焰影幢幢、此夕聞君誦九江、垂死病中驚起坐、暗風吹雨入寒窓」と。居易以爲らく此句他人すら尙聞くべからず。況んや僕の心をやと。此詩真に同調と謂ふべし」と評してある。

舟行阻風寄李十一舍人

舟行風に阻てらる、李十一舍人に寄す

扁舟厭泊煙波上。扁舟泊するを厭ふ煙波の上、
輕策閒尋浦嶼間。輕策閒に尋ぬ浦嶼の間。
虎蹋青泥稠似印。虎は青泥を踏みて印似りも稠く、
風吹白浪大於山。風は白浪を吹いて山よりも大なり。
且愁江郡何時到。且愁ふ江郡何時にか到らん、
敢望京都幾歲還。敢て望む京都幾歲にか還らん。
今日料君朝退後。今日料る君が朝より退きて後、

【字解】(一) 扁舟 小舟。

(二) 輕策 輕き杖。

(三) 江郡 江州なり。

迎寒新耐煖開顏

寒を迎へて新耐煖めて顔を開くを。

【十一】好小耐酒、故云。

【註】新耐、酒の名。

【題義】風の爲に舟止に遇つた時、長安に居る李舍人（十一は排行、舍人は官名、中書舍人。李建である）に寄せた詩である。

【詩意】煙波の上に舟を泊してゐるのも厭になつたから、杖を曳いて岸上を散歩した。泥の上の虎の足跡は印を押したやうで、風に捲上げられる大浪は山のやうである。江州へは何日著けるやら心細さを感じ、早く都へ還りたいものだと思ふ。察するに今頃は君は朝廷から退出して、例の新耐を煖めて寒さ凌ぎに傾けてゐるであらう。羨ましいことだ。

雨中題衰柳

雨中衰柳に題す

濕屈青條折。寒颿黃葉多。

濕に屈して青條折れ、寒に颿りて黃葉多し。

不知秋雨意。更遣欲如何。

知らず秋雨の意、更に如何せんと欲せしむる。

【字解】（一）青條、青い枝。

【題義】雨中、秋になつて衰へた柳に題した詩である。

【詩意】雨が降つて濕氣の爲に枝が折れ、寒風の爲に黄色になつた葉が飛散し、見る影もない哀れな姿である。既に踏んだり蹴たりの目に遇はせて、更に秋雨は此衰柳をどうしようと思つてゐるのであらう。氣の毒なことだ。

題王處士郊居

王處士の郊居に題す

半依雲渚半依山。

半は雲渚に依り半は山に依る。

愛此令人不欲還。

此を愛して人をして還るを欲せざらしむ。

負郭田園八九頃。

郭を負ふ田園八九頃。

向陽茅屋兩三間。

陽に向へる茅屋兩三間。

寒松縱老風標在。

寒松は縱ひ老ゆるも風標在り。

野鶴雖飢飲啄閒。

野鶴は飢ゑたりと雖も飲啄閒なり。

一臥江村來早晚。

一たび江村に臥して來早晚。

著書盈帙鬢毛斑。

著書帙に盈ちて鬢毛斑なり。

【字解】（一）負郭、郊外なり。

（二）向陽、南を向いてゐる。三兩、間は間敷の二三あること。

（三）風標、器量なり。

（四）飲啄、飲食なり。

（五）早晚、久しき意。

【題義】王處士（王は姓、學徳ありて仕へざる人を處士といふ）の郊外の閑居に題した詩である。

【詩意】王處士の閑居は川と山とに跨つてゐて、人をして還るのを忘れしめる程よい。且郊外の田園が八九頃もあり、二間三間ばかりの茅屋が南を向いて建てられてある。松は老いてはゐるが流石に高尚な趣を失はず、野飼の鶴は飢えても飲食を食らなぬ。處士は此處に隱居してから既に久しきを経、著書は帙に盈ち頭髮も大分白くなつた。

歲晚旅望

歲晚旅望

朝來暮去星霜換、朝來暮去星霜換り、
 陰慘陽舒氣序牽、陰慘陽舒氣序牽く。
 萬物秋霜能壞色、萬物秋霜能く色を壞り、
 四時冬日最凋年、四時冬日最も凋年。
 煙波半露新沙地、煙波半露る新沙の地、
 鳥雀羣飛欲雪天、鳥雀羣り飛ぶ雪ふらんと欲する天。
 向晚蒼蒼南北望、晚に向ひ蒼蒼として南北を望めば、
 窮陰旅思兩無邊、窮陰旅思兩ながら邊無し。

【字解】(一) 氣序 氣節の順序。

(二) 四時 春夏秋冬。

(三) 蒼蒼 夕方の色。薄暗き貌。

(四) 窮陰 冬の終の陰氣。旅思は旅愁。

【題義】歲の暮に旅中四方を望み見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】一日一日と歲月が移り、陰陽往來して氣節が變ずる。秋になれば萬物皆其色を失ひ、冬になれば凋衰の極に達する。今や煙波が立ち罩めて半沙地を露し、鳥雀が羣り飛んで雪でも降らうとする空模様である。暮色の蒼然たる時南北を望めば、陰氣と旅愁とが止めどなく身に逼つてくる。

晏坐閒吟

晏坐閒吟

昔爲京洛聲華客、昔は京洛聲華の客と爲り、
 今作江湖潦倒翁、今は江湖潦倒の翁と作る。
 意氣銷磨羣動裏、意氣銷磨す羣動の裏、
 形骸變化百年中、形骸變化す百年の中。
 霜侵殘鬢無多黑、霜は殘鬢を侵して多黒無く、
 酒伴衰顏只暫紅、酒は衰顏に伴ひて只暫く紅なり。
 賴學禪門非想定、賴に禪門の非想定を學び、
 千愁萬念一時空、千愁萬念一時に空し。

【字解】(一) 晏坐 晏は安なり安らかに坐す。

(二) 京洛 みやこ。長安及び洛陽。

(三) 江湖 片田舎。潦倒翁は零落した老翁。

(四) 羣動 多くの物の活動。

(五) 百年 人の一生をいふ。

(六) 非想定 佛法のまとり。楞嚴經に、非想非非想處の語あり。

【題義】安坐して靜かに吟じたといふ義。

【詩意】余も昔は帝京にゐて榮華の身にもなつたが、今は片田舎のおちぶれた一老爺に過ぎない。されば總ての物は皆活動してゐるが自分は意氣全く銷沈し、容貌も段段老衰して來て、鬢の毛は殆ど全く白くなり、只酒の力で僅に顔が紅になるぐらゐのものだ。併し幸に禪學の悟を得てゐるので、心中の愁は一時に消盡する。

題李山人

李山人に題す

厨無煙火室無妻。厨に煙火無く室に妻無し、
籬落蕭條屋舍低。籬落蕭條として屋舍低し。
每日將何療飢渴。毎日何を將てか飢渴を療する、
井華雲粉一刀圭。井華雲粉一刀圭。

【字解】(一) 籬落 まがき。垣根。蕭條は淋しき貌。

(二) 井華雲粉 仙藥の名であらう。刀圭は藥物の量の名。

【題義】李山人に題した詩である。

【詩意】山人は全く俗界を離れた仙人であるから、厨には煙火なく室には妻なく、閑靜な小屋の中に住んでゐる。毎日何を以て飢渴を凌いでゐるかといふに、只井華雲粉といふ仙藥をほんの一些服用するだけだ。

讀莊子

莊子を讀む

去國辭家謫異方。國を去り家を辭して異方に謫せらる、
中心自怪少憂傷。中心自ら怪む憂傷少きを。
爲尋莊子知歸處。莊子を尋ねて歸處を知り、
認得無何是本鄉。無何は是本郷なるを認め得たるが爲なり。

【字解】(一) 異方 他處。江州を指す。(二) 歸處 心の歸着する處。(三) 無何 莊子應帝王篇に、「予方に造物者と人とならんとす。厭げば則ち又かの奔馳の馬に乗り以て六極の外に出でて無何有の郷に遊

び以て壤墳の野に處る」云々とある。何等心の拘束なき境地をいふ。本郷は即ち歸處。

【題義】莊子を讀んで安心立命を得たことを述べた詩である。

【詩意】帝都を去り家郷を辭して他境に貶せられたのだから、大に憂愁するのが當然であるのに、なぜか憂傷の少いのを窃に怪んだが、それは他ではなく、莊子を讀んで心の歸處を尋ねた結果、妄心に囚はれない無何有の郷こそ即ち心の歸處であるといふことを悟り得たからであつた。

江樓偶宴贈同座

江樓偶宴、同座に贈る

南浦閒行罷。西樓小宴時。南浦閒行罷み、西樓小宴の時。
望湖凭檻久。待月放杯遲。湖を望みて檻に凭ること久しく、月を待ちて杯を放つ。

律詩 題李山人 讀莊子 江樓偶宴贈同座

江果嘗盧橘。山歌聽竹枝。江果盧橘を嘗め、山歌竹枝を聴く。
相逢且同樂。何必舊相知。相逢ひ且同く樂む、何ぞ必ずしも舊相知ならん。

【字解】(一) 同座。同席の客。(二) 開行。しづかに歩む。(三) 欄干。てすり。(四) 盧橘。柑橘類の果の名。(五) 竹枝。土俗な歌する詩。(六) 舊相知。舊友。

【題義】江樓で偶然宴會を開き、席上の客に贈つた詩である。

【詩意】南方の川縁を散歩して歸り、諸君を請じて西樓に小宴を開いた。欄干に凭つて湖上の景を飽くまで眺め、月の出るのを待つていつまでも杯を措かず、盧橘を食つたり竹枝を聴いたりして共に樂みを盡した。舊友でなければ共に樂むに足らないわけではない。

放言 五首 并序

放言五首 并に序

元九在江陵時。有放言長句詩五首。韻高而體律。意古而詞新。予每詠之。甚覺有味。雖前輩深於詩者。未有此作。唯李頎有云。濟水至清河自濁。周公大聖接輿狂。斯句近之矣。予出佐潯陽。未屆所任。舟中多暇。江上獨吟。因綴五篇以續其意耳。

【訓讀】元九江陵に在りし時、放言長句の詩五首有り。韻高くして體律、意古くして詞は新なり。予毎に之を詠じ、甚だ味有るを覺ゆ。前輩の詩に深き者と雖も、未だ此作有らず。唯だ李頎云へる有り。濟水は至つて清きも河は自ら濁る。周公は大聖なれども接輿は狂すと。斯句之に近し。予出でて潯陽に佐たり。未だ任せらるる所に屆らず。舟中暇多し。江上獨吟し、因て五篇を綴りて以て其意を續ぐ耳。

【字解】(一) 江陵。地名。元頎は嘗て江陵士曹に貶せられた。(二) 放言。ほしいままに言ふ。詩題なり。(三) 李頎。唐の詩人。(四) 接輿。古の楚人。(五) 佐。海關。江州司馬に貶せられたこと。

〔一〕

〔一〕

朝眞暮僞何人辯。朝眞暮僞何人か辯せん、
古往今來底事無。古往今來底事か無からん。
但愛臧生能詐聖。但愛す臧生が能く聖を詐るを、
可知寧子解佯愚。知る可し寧子が解く愚を佯はるを。
草螢有耀終非火。草螢耀有れども終に火に非ず、
荷露雖團豈是珠。荷露團なりと雖も豈是れ珠ならんや。

【字解】(一) 臧生。臧文仲を指すか。論語に「子曰く、臧文仲蔡を居き節に山し境に藪す。何如ぞ其れ知ならん」とある。(二) 寧子。論語に「齊武子邴道あれば則ち知なり、邴道なければ則ち愚なり。其知には及ぶべきなり、其愚には及ぶべからざるなり」とある。(三) 荷露。蓮の葉の

不取燔柴兼照乘。取らず燔柴と照乗と、
可憐光彩亦何殊。憐む可し光彩亦何ぞ殊ならん。

上の露。【燔柴】天子が柴を焼いて天を祭ること。照乗は車の前後十二乗を照す珠。

【題義】元稹の放言と題する詩に倣つて作つた詩である。

【詩意】朝暮の眞偽は何人が能く之を辨するであらう。古の去り今の來るは何の世でもないことはない。大森は聖の如く大知は愚に似てゐる。草にとまれる螢は光を放つが火ではなく、蓮の葉の露は圓いけれども珠ではない。天を祭る燔柴と車十二乗を照す珠とを擧げるまでもなく、光を發する點は皆同じである。

〔一〕

〔二〕

世途倚伏都無定。世途の倚伏都て定まる無く、
塵網牽纏卒未休。塵網の牽纏卒に未だ休まず。
禍福廻還車轉轂。禍福廻還車轂を轉じ、
榮枯反覆手藏鉤。榮枯反覆手に鉤を藏す。
龜靈未免刳腸患。龜靈なるも未だ腸を刳かる患を免れず、

【字解】〔一〕倚伏、禍福なり。老子に「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所」とあるに本づく。〔二〕塵網、世界なり。〔三〕牽纏、遊戯の名、教人一組となりて手に鉤を置し、どの人の手の中に在るかと言ひ當てしむるなり。

馬失應無折足憂。馬は失して應に足を折る憂無かるべし。

【一】馬失云云、塞翁が馬の故事。

不信君看奕棋者。信せずんば君看よ奕棋の者、

【二】奕棋、碁・將碁の類。

輸贏須待局終頭。輸贏須らく待つべし局の終頭。

【三】輸贏、勝敗。

【詩意】世路の禍福は定まりなく、世界は身にまとうて休むことがない。禍福の廻轉は車の如く、榮枯の反覆は藏鉤の戲のやうである。龜は卜筮に用ひられて靈あれども其れが爲に腸を刳かれる。馬に逃げられたのは不幸のやうであるが、其子が落馬して足を折ることがないとすれば寧ろ幸と謂ふべきである。畢竟禍福は轉轉定まりなきものである。君若し余が言を信せずば、かの碁や將碁をさすのを見たまへ。勝つたり負けたりして終局にならなければ本當の勝負はわからないではないか。所謂棺を蓋うて論定まるとは此事である。

〔三〕

〔四〕

贈君一法決狐疑。君に一法を贈りて狐疑を決せしむ、
不用鑽龜與祝著。用ひず鑽龜と祝著と。
試玉要燒三日滿。玉を試むるには燒くこと三日に滿たん

眞玉燒三日不熱。

【一】ことを要す、

【字解】〔一〕狐疑、疑態。〔二〕鑽龜、龜の甲を鑽りて卜ふこと。祝著は書を用ひて占ふこと。〔三〕流言、無稽の事をいひふらすこと。周公が成王の攝政たりし時、

辨材須待七年期。材を辨するには須らく七年の期を待つ。

鑿木生七年而後知。

べし。

周公恐懼流言日。周公は恐懼す流言の日、

王莽謙恭未篡時。王莽は謙恭なり未だ篡はざりし時。

向使當時身便死。向に當時身便ち死せしめば、

一生眞僞復誰知。一生の眞僞復誰か知らん。

管叔・蔡叔の二人が周公が成王の位を奪はんとする由を流言した。周公因つて東征して管叔を誅し蔡叔を放つ。
【一】王莽 漢の平帝に仕へて大司馬となり、陽に恭謙にして以て人望を收め、遂に平王を弑し、漢の皇位を奪ひ國を新と號した。

【詩意】君に疑を決する一法を教へよう。それは卜筮などを用ひなくとも明にわかる。すべて事を視るに一時の状態を以てせず、長い目で觀察することである。玉を試みるには三日焼いて見なければわからない。(本當の玉は三日焼いても熱くならない)豫章(木の名)を辨するには七年待たなければならぬ。周公は管叔・蔡叔の流言した時大に恐懼した。恰も篡奪者のやうに見えたが決してさうではなかつた。王莽が未だ位を篡はないうちは大に恭謙の人らしく見えたが、後には篡奪者となつた。彼等が若し早く死んだならば一生の眞僞は終にわからなかつたであらう。故に事の眞僞を知るには一部始終を通觀しなければならぬ。

【四】

【四】

誰家第宅成還破。誰が家の第宅ぞ成りて還破るる、

何處親賓哭復歌。何の處の親賓ぞ哭して復歌ふ。

昨日屋頭堪炙手。昨日は屋頭手を炙るに堪へたり、

今朝門外好張羅。今朝は門外羅を張るに好し。

北邙未省留閑地。北邙未だ省す閑地を留むるを、

東海何曾定波。東海何ぞ曾て定波有らん。

莫笑賤貧誇富貴。賤貧を笑ひ富貴に誇る莫れ、

共成枯骨兩如何。共に枯骨と成りて兩ながら如何。

【字解】【一】炙手 駝豚の盛なこと。

【二】張羅 雀を捕ふる網を張ること。誰も來り訪ふ者のないこと。

【三】北邙 洛陽の北に當る共同墓地。閑地は、わき地。

【詩意】誰の邸宅か知らぬが建てられる間もなく破られた。親賓が集つて哭泣してゐるかと思へば間もなく歎歌を奏してゐる。昨日までは勢威赫赫たりし權力家も、今朝は失墜して一人寄り附かぬやうになつた。榮枯盛衰は實に定めなきものである。北邙山には後から後から墓が出来て、押すな押すなの混雜を極め、東海には未だ嘗て一定の波はなく日夜動揺してゐる。だから貧賤を笑ひ富貴に誇つてはならない。いづれは同じ土の下の枯骨となるではないか。

〔五〕

〔五〕

泰山不要欺毫末。 泰山は毫末を欺くを要せず。
 顔子無心羨老彭。 顔子は老彭を羨むに心無し、
 松樹千年終是朽。 松樹千年終に是れ朽つ、
 槿花一日自爲榮。 槿花一日自ら榮を爲す。
 何須戀世常憂死。 何ぞ須ひん世を戀ひて常に死を憂ふるを、
 亦莫嫌身漫厭生。 亦身を嫌ひて漫に生を厭ふ莫れ。
 生去死來都是幻。 生去死來都是是れ幻、
 幻人哀樂繫何情。 幻人の哀樂何の情にか繫る。

〔一〕 顔子 孔子の高弟、天死せり。
 老彭は古の長壽者の名。
 〔二〕 槿花 むくげの花。其花一日にして萎む。

【詩意】 泰山は毫末を欺く要はなく、顔子は老彭を羨む心はない。大小壽夭宜しく天の賦與に従ふべきである。千年の松も終には枯れ、槿の花は一日にもせよ榮華は榮華だ。世を戀ひて死を憂ふるにも及ばず、又身を嫌ひて生を厭ふにも及ばない。生死は要するに夢幻である。夢幻の人の哀樂は心に繫くる價值はない。

歲暮道情 二首

歲暮情を道ふ 二首

壯日苦曾驚歲月。 壯日苦だ曾て歲月に驚く、
 長年都不惜光陰。 長年都て光陰を惜まず。
 爲學空門平等法。 空門平等の法を學ぶが爲に、
 先齊老少死生心。 先づ老少死生の心を齊うす。

【字解】 〔一〕 壯日 血氣盛なりし時。
 〔二〕 長年 老年。
 〔三〕 空門平等法 佛門にて人事の得失を同一視する法。

【題義】 歲暮に方りて感想を述べた詩である。

【詩意】 血氣の頃は歲月の移るのが早いのに驚いたが、老年になつてからは歲月を惜む心がなくなつた。それは佛道を學んで老少死生を同一視する悟が開けたからである。

〔一〕

〔二〕

半故青衫半白頭。 半は故の青衫半は白頭、
 雪風吹面上江樓。 雪風面を吹いて江樓に上る。
 禪功自見無人覺。 禪功自ら見れて人の覺る無し、
 合是愁時亦不愁。 合に是れ愁ふべき時にも亦愁へず。

【字解】 〔一〕 青衫 司馬の服。

〔二〕 禪功 禪學の功。

【詩意】白髮頭に相變らずの青衫を着て、吹雪に顔を撲たれながら江樓に上つた。禪學の功が現れて來たが人にはわからない。併し愁ふべき時にも愁へないので、自分には明かにわかる。

讀李杜詩集因題卷後 李杜の詩集を讀み、因つて卷後に題す

翰林江左日、員外劍南時。翰林江左の日、員外劍南の時。

不得高官職、仍逢苦亂離。高き官職を得ず、仍苦き亂離に逢ふ。

暮年通客恨、浮世謫仙悲。暮年通客の恨、浮世謫仙の悲。

吟詠流千古、聲名動四夷。吟詠千古に流れ、聲名四夷を動かす。

文場供秀句、樂府待新詞。文場秀句を供し、樂府新詞を待つ。

天意君須會、人間要好詩。天意君須らく會すべし、人間好詩を要む。

實知李杜目、白爲三謫仙人。

【字解】(一)翰林、翰林學士。李白嘗て翰林學士となる。江左は江東即ち吳。李白嘗て吳に遊ぶ。(二)員外、杜甫嘗て工部員外郎となる。劍南は蜀なり。(三)暮年、晩年。通客は世を遍くする隱者。(四)文場、文壇なり。(五)樂府、音樂を掌る役所。

(六)人間、世間。

【題義】盛唐の大詩人たる李白・杜甫の詩集を讀み、その詩卷の後に題した詩である。

【詩意】翰林學士たりし李白は晩に吳に遊び、工部員外郎たる杜甫は蜀に遊び、白は高き官職を得ずして終り、甫は仍亂離の苦みに逢ひ、甫は衰老して通客の恨を抱き、白は謫仙の悲みを抱いた。されど俱に吟詠を以て千古に傳はり、聲名内外に振ひ、甫は文壇に秀句を供し、白は樂府に新詞を呈した。天が世間に好詩を供せしむる爲に、此二大詩星を生んだものだといふことがわかる。

強酒

強酒

若不坐禪銷妄想。若し坐禪して妄想を銷せずんば、

即須吟醉放狂歌。即ち須らく吟醉して狂歌を放にすべし。

不然秋月春風夜。然らずんば秋月春風の夜、

爭那閒思往事何。争でか閒に往事を思ふを那何せん。

【題義】強ひて酒を飲む由を述べた詩である。

【詩意】若し坐禪して妄想を絶つのでなければ、醉吟して狂歌を放にするがよい。然らずんば春風秋月人をして往事を追憶せしむる時、何を以て心の悲みを慰することが出來ようぞ。

獨樹浦雨夜寄李六郎中

獨樹浦にて雨夜李六郎中に寄す

忽憶兩家同里巷。忽ち憶ふ兩家里巷を同うせしことを、
 何曾一處不追隨。何ぞ曾て一處か追隨せざらん。
 閒遊預算分朝日。閒遊預め算す分朝の日、
 靜語多同待漏時。靜語多く同うす待漏の時。
 花下放狂衝黑飲。花下に放狂して黒を衝きて飲み、
 燈前起坐徹明棋。燈前に起坐して明に徹して棋す。
 可知風雨孤舟夜。知る可し風雨孤舟の夜、
 蘆葦叢中作此詩。蘆葦叢中此詩を作るを。

【字解】(一)分朝 分曹といふが如し。部を分ちて事務を執ること。
 (二)待漏 漏は水時計。羣臣の入朝する時、宮門の閉くまで時の至るを待つこと。
 (三)衝黒 暗くなるまで。
 (四)徹明 夜の明けるまで。

【題義】獨樹浦で雨の夜に李六郎中(六は排行、郎中は官名)に寄せた詩である。

【詩意】君の家と僕の家とは同じ町内に在つて、どこへ行くにも連れ立つて行つた。分朝の時には互に閒遊の豫算を立て、待漏の時には俱に語り合ひ、花の下で夜になるまで放狂し、燈前に起坐して夜の明けるまで棋を闘はした。君と僕とはかくまで深交があつたのだから、今風雨孤舟の夜に蘆葦の茂つた中で此詩を作つた僕の心中が君にはよくわかるであらう。

聽崔七妓人等

崔七が妓人の箏を聽く

花臉雲鬟坐玉樓。花臉 雲鬟玉樓に坐す、
 十三絃裏一時愁。十三絃裏一時に愁ふ。
 憑君向道休彈去。君に憑み向ひ道ふ彈することを休め去れ。
 白盡江州司馬頭。白盡す江州司馬の頭。

【字解】(一)花臉 美しき顔。雲鬟は美しき髪。

(二)江州司馬 白樂天自ら謂ふ。

【題義】崔七が妓の彈する箏を聽いて作つた詩である。
 【詩意】顔は花の如く美しく、髪は雲の如く美しき崔七の愛妓が、玉樓に坐して箏を弾けば、聽く者をして忽ち愁を發せしめる。君に頼むが、どうぞもう彈くのを止めてくれぬか。この上彈かれては吾が頭髮が眞白になつてしまふから。

望江州

江州を望む

江廻望見雙華表。江廻りて望み見る雙華表、
 知是潯陽西郭門。知る是れ潯陽西郭の門。
 猶去孤舟三四里。猶孤舟を去ること三四里、

【字解】(一)雙華表 二つの鳥居。華表は我邦の鳥居の如きもので、墓地又は江郭などの入口に立てる。
 (二)潯陽 江州なり。今の九江。

水煙沙雨欲黃昏。水煙沙雨黃昏ならんと欲す。

【題義】舟の上から江州を望見して作つた詩である。

【詩意】江水の流の廻轉する處から望見すると二つの華表が見える。あれは潯陽の西の郭の門である。我が乗れる舟を距ること三四里（一里は我が約六丁にあたる）の先に在つて水上の煙と沙洲の雨とが濛濛として日も將に暮れんとしてゐる。

初到江州

初めて江州に到る

潯陽欲到思無窮。潯陽に到らんと欲して思窮り無し、

庾亮樓南溢口東。庾亮樓南溢口の東、

樹木凋疎山雨後。樹木凋疎なり山雨の後、

人家低濕水煙中。人家低濕す水煙の中、

菰蔣餒馬行無力。菰蔣の餓馬は行くこと力無く、

蘆荻編房臥有風。蘆荻の編房は臥して風有り、

遙見朱輪來出郭。遙に朱輪の來りて郭を出づるを見れば、

【字解】【一】潯陽 江州。今の

江西省九江縣。

【二】庾亮樓 晉の庾亮が江州を鎮

せし時建つる所。溢口は蘆水の長江

に入る處。九江縣の西に在る。

【三】菰蔣 まこも。餓馬は飢ゑた

馬。

【四】編房 蘆や荻を編んで作つた

部屋。

【五】朱輪 朱塗の車。

相迎勞動使君公

相迎へて勞動す使君公と。

【題義】初めて江州に到着した時の様を述べた詩である。

【詩意】庾亮が樓の南、溢口の東なる潯陽に到着せんとして感慨無量である。山雨の後なので、樹の葉が落ちて疎に水煙の深い卑濕の地に人家が竝んでゐる。其前には菰蔣を食ひつつ瘦馬が力なげに行き、蘆や荻で編んだ部屋には隙風が吹込みさうである。遙に朱塗の車が郭を出て來るのを見た。すると大勢の人が相迎へて奔走し刺史權だとわめてゐた。

【六】使君公 刺史の稱。

醉後題李馬二妓

醉後李馬二妓に題す

行搖雲髻花鈿節。行くゆく雲髻花鈿の節を搖かし、

應似霓裳趁管絃。應に霓裳の管絃を趁ふに似たるべし。

艷動舞裙渾是火。艷に舞裙を動かせば渾て是れ火、

愁凝歌黛欲生煙。愁へて歌黛を凝せば煙を生せんと欲す。

有風縱道能廻雪。風有れば縱ひ能く雪を廻すと道ふも、

無水何由忽吐蓮。水無くして何に由りてか忽ち蓮を吐く。

【字解】【一】雲髻 雲の如く美

しき髪。花鈿は卷十二、長恨歌を見

よ。

【二】霓裳 舞曲の名。

疑是兩般心未決。疑ふらくは是れ兩般心未だ決せず、
雨中神女月中仙。雨中の神女か月中の仙か。

【三】兩般 兩様なり。

【題義】 醉後に李・馬の二妓に題し、その麗美を稱した詩である。

【詩意】 雲髻花鈿を揺かして歩く姿は、管絃の音に應じて霓裳の曲を舞ふやうで、舞裙の艶紅は火の如く、愁怨する凝黛は煙の如く、その舞ふ様は風ありて雪を廻すかと思はれ、水なきに蓮花のどうして開くかと疑はれる。雨中の神女か月中の仙女か、どちらとも決しかねる程の美人である。

盧侍御小妓乞詩座上留贈

盧侍御が小妓詩を乞ふ、座上に留め贈る

鬱金香汗

歌巾

鬱金香の汗は歌巾を裏し、

山石榴花染舞裙

山石榴の花は舞裙を染む。

好似文君還對酒

文君よりも好く還酒に對し、

勝於神女不歸雲

神女に勝れども雲に歸せず。

夢中那及覺時見

夢中は那ぞ覺むる時見るに及かん、

宋玉荆王應羨君

宋玉荆王應に君を羨むべし。

【字解】 一 鬱金香 香草の名。

二 山石榴 ヤまつつじ。

三 文君 漢の司馬相如の妻卓文君。

四 神女 楚の宋玉の高唐賦に「昔先王嘗て高唐に遊び夢に一婦を見たり、曰く、妾は巫山の女なり、願はくは枕席を薦めんと。因つて之を幸す。去る時辭して曰く、妾は巫山の陽、

高丘の陽に在り、且には朝雲となり暮には行雨となる」と云々と。

【五】荆王 楚王。

【題義】 盧侍御の小妓が樂天に詩を乞うたので、此詩を座上に留めて贈つたのである。

【詩意】 鬱金香草の香の高い汗が衣巾を裏し、紅の山石榴の花の色をした舞衣をまとい、卓文君よりも美しき姿で酒に侍し、巫山の神女に勝つて然も雲にならず、實にたとふるに物なき美人である。且夢中に見るは覺むる時見るには及ばない。されば宋玉や楚王も恐らく盧侍御を羨むであらう。

309
65

【一】...
【二】...
【三】...
【四】...
【五】...
【六】...
【七】...
【八】...
【九】...
【十】...
【十一】...
【十二】...
【十三】...
【十四】...
【十五】...
【十六】...
【十七】...
【十八】...
【十九】...
【二十】...

終